

BAB IV

KESIMPULAN

Dari hasil analisis yang dilakukan pada Bab III terhadap data-data yang keseluruhannya diambil dari novel Anokoro karya Sakura Momoko, mengenai 助詞 ‘*joshi*’ の ‘*no*’ sebagai 格助詞 ‘*kakujoshi*’, penulis dapat menyimpulkan bahwa 格助詞 ‘*kakujoshi*’ の ‘*no*’ tidak bisa berdiri sendiri dan tidak memiliki makna, tetapi apabila menempel pada nomina 格助詞 ‘*kakujoshi*’ の ‘*no*’ memiliki berbagai fungsi, yaitu berfungsi untuk menghubungkan antar nomina. Nomina yang ada setelah 助詞 ‘*joshi*’ の ‘*no*’ berfungsi menerangkan nomina yang mengikuti ‘*joshi*’ の ‘*no*’.

格助詞 ‘*kakujoshi*’ の ‘*no*’ berfungsi sebagai kata ganti orang atau benda, berfungsi sebagai nominalisator (membendakan), apabila 助詞 ‘*joshi*’ の ‘*no*’ mengikuti verba, ajektiva *i* dan ajektiva *na*. Berfungsi menunjukkan perumpamaan, bila 助詞 ‘*joshi*’ の ‘*no*’ + よう ‘*you*’. Berfungsi menunjukkan alasan atau terjadinya sesuatu, apabila 助詞 ‘*joshi*’ の ‘*no*’ + ため ‘*tame*’.

Makna yang terbentuk dari pengabungan 格助詞 ‘*kakujoshi*’ の ‘*no*’ dengan nomina dan nomina lain dalam hasil analisis ini menunjukkan arti yang berbeda-beda, makna yang terbentuk adalah:

1. ...yang terjadi pada...
2. ...pada...
3. ...yang dilakukan pada...

4. ...berada...
5. ...milik/ punya...
6. ...dari...
7. ...jenis kelamin...
8. ...yang dihasilkan oleh...
9. ...buatan...
10. ...jenis...
11. ...menunjukkan profesi...
12. ...yang...
13. ...situasi pada...
14. ...sesuatu yang...
15. ...hal tentang...
16. ...hal...
17. ...mirip...
18. ...seperti...
19. ...untuk...

格助詞‘の’用法分析
(統語論と意味論からの考察)

イエシ

0042065



マラナタキリスト大学文学部

日本文学部

バンドン

2008

序論

日本語の助詞は、さまざまな機能を有している。助詞は、それだけでは意味をなさず、文の中にあって初めてその意味が現われるのである。助詞の果す役割は大変重要であり、その配置を間違ってしまうと、文の意味が変わってくるのである。

日本語の助詞は、格助詞、接続助詞、副助詞、終助詞の四種類ある。

格助詞の「の」はさまざまな機能及び意味を持っている。例えば、次の例を見てみよう。

1. 父の靴 (kawashima, 1999:145)
2. 外国語を学ぶのは、難しいですね。(Chino,1991:60)

1の「の」は名詞と名詞をくっつける働きを持ってあり、所有という意味を表している。一方、2の「の」はその前に出た節を名詞化する働きを持っているのである。上記の理由に基づき、本論文では、格助詞「の」の用法を分析してみることにする。

本論

分析するにあたってはさまざまな例文を取り出して、それらに出た格助詞の「の」の果す役割及び意味を見してみる。

I.

1. 今日の新聞。(Makino dan Tsutsui, 2003:313)

上の文の「の」は、名詞と名詞意をくっつけてる。時を表す「今日」という名詞と新聞という名詞である。したがって、上の文では、格助詞の「の」は、時を表しているのである。

2. 学校の前。(Chino, 1991:59)

上の文の「の」は、「学校」という場所を示す名詞と「前」という方向を示す名詞をくっつけているのである。したがって、上の文の「の」は所を示すのである。

3. 私のかばんの中に地図があります。(Kawashima, 1999:146)

上の文の「の」は、「私」という一人称代名詞と「かばん」という個有名詞をくっつける働きをしている。「の」の後に出てくる「かばん」が「の」の前に出た「私」の所有物であること表すのである。したがって、上の文では、格助詞の「の」は、所有あるいは所属を表しているのである。

4. バラの花を贈る。(Guruupu, 1998:461)

上の文の「の」は、名詞「バラ」と名詞「花」をくっつけている。上の文は「バラという花を贈る」と言い考えることができる。したがって、「バラ」は「花」の一種であることがわかるのである。したがって上の文の格助詞は種類を表すのである。

5. 彼の書いた絵はすばらしい。(Guruupu, 1998:462)

上の文の「の」は、主語である「彼」を示している。この場合、「の」は、「が」に置き換えることができるのである。「彼が書いた絵はすばらしい」。

6. 病気のとき。(Tomita, 1993:73)

上の文は「病気」という名詞と、時間を表す名詞「とき」をくっつけている。「病気」の後に現れる「の」は、状態を表しているのである。

II. 「人」あるいは「物」という名詞の代りに用いる「の」。

例 彼女が欲しいのは、新しいピアノです。(Chino, 1991:60)

上文の「欲しいの」の「の」は、「ピアノ」と同格である。つまり、「の」は、ピアノの代りとして働いているのである。

III. 動詞を名詞化する働きをする「の」。

例 帰るのはいつか。(Sudjianto, 2000:46)

上の文の「の」は「帰る」という動詞を名詞化する。

IV. 比喩を表す「の」。

例 この砂は砂糖のように白いね。(Kawashima, 1999:154)

「砂糖の」の後に名詞「よう」が出ているが、この「よう」は、似ているという意味を持っているのである。したがって、この「の」は比喩を表すのである。

V. 理由を表す「の」。

例 私は、昨日、病気のため学校を休みました。(Tomita, 1993:75)

の は名詞「病気」と名詞「ため」をくっつけている。「の」の後にでてくれ名詞、つまり「ため」はその前の名詞「病気」の理由になっている。したがって、上の文では「の」は理由を表しているのである。

結論

格助詞の用法を分析してみた結果、次の結論を引き出すことができる。

- 格助詞「の」は、名詞と名詞をくっつける働きをする。
- 格助詞「の」は、後に出てくる名詞が前に現われて名詞を陳述する役割を果す。
- 「人」「物」などの代りとして用いられる。
- 動詞を名詞化する働きをする。
- 比喩を表す。
- 理由などを表す。